

赤ちようちん

藤田敏八 日活 1974年

私が学生だった七〇年代前半、日活の藤田敏八は、商業映画が作る「青春映画」中で最も鋭く若者を見つめている監督だった。彼の新作映画を見ることはどうやって生きているかを模索していた私には唯一、自分を確かめる場であった。

授業の合間に飯田橋の名画座ギンレイ・ホールに出かけた。よくやっていたのが〈神代辰巳・藤田敏八特集〉だった。神代の『線玉の井・ぬけられます』は特に見たいわけではないのに何度も見た。その中に藤田の秋吉久美子三部作の第一作『赤ちようちん』があった。『八月の濡れた砂』にはヌーベルバーグの模倣しか感じられなかったが、これは初めて藤田映画でピンときた作品だった。甘いところもあったがラストの決め方には唸った。若い同棲カップルは山の手から下町に引越していくこと少しずつ変調していき妻は狂ってしまう。仕方なく夫は残された赤ん坊を抱いて新たな土地に引越していく。この突き放したペースがよかった。この後、この青年はどう生きていくのか、それを考えるところから私の商業映画デビュー作の構想が始まっていった。

パピヨン

フランクリン・J・シャフナー 米 1973年

1974年9月8日、高1の秋、同級生のK君に誘われて、今は無き津パール劇場で外国映画を初めて見た。それまでの私が見る映画といえば、親に連れてもらった「まんがまつり」に始まり、中学生になって、当時の憧れだった天地真理、森田健作らの主演作を友達と見ていた程度だった。

パピヨンはフランス語で蝶という意味だとか、主演の二人はどちらもスゴイ俳優だとか、K君はいろいろ前説をしてくれたのだが、その情報は全く頭に残らず白紙に近い状況で見た。無実の罪を着せられた男が何度も脱獄を繰り返すという事実に基づいたストーリーで、このような事が世界では起こっているのだと驚いたし、二大スターが、見るに堪えない汚れた姿で登場し、このよくなことも俳優はしないといけないのかと同情をした。そして、スクリーンに広がる大海、自由を求めて脱獄を行う男の執念、初めて体験する圧倒的なスケール感が本作にはあり、私を映画館へ通わせるきっかけとなった。